

巻頭言

本研究所では、創立以来一貫して「がんに関する学理及びその応用研究」を進めています。2018 年も、全国の附置研の中で唯一、がんの研究に特化した本研究所の特色を生かして、優れた基礎研究とそのシーズを活用した革新的な診断・治療法の開発、また、将来のがん研究や医療を担う人材の育成を目指して活動して参りました。

まず、共同利用・共同研究拠点活動として、本年度は、61 件の課題を採択し、共同研究を進めました。また、特色あるがん研究拠点となるよう、国際共同研究に加え、新たに異分野融合共同研究枠を設け、数件が現在も進行中です。拠点活動の活性化のため、患者由来オルガノイドをはじめとした研究資源の充実(組織・細胞バンク、共通機器整備)や成果報告会の開催による情報交換などを実施しました。本研究所の拠点活動は、本年、文部科学省において行われた中間評価においては A 評価を得るなど、高く評価されています。

国際的ネットワーク形成も活動の大きな柱です。本年は、5 月にソウル大学がん微小環境研究センター(SNU-GCRC)の研究者を本学に招きシンポジウムを開催するとともに、研究室訪問による研究交流を進めました。また 9 月には、所長以下 5 名のメンバーが復旦大学上海がんセンターを訪問し、合同シンポジウムを開催しました。11 月には、本研究所のメンバーが、ナノ生命科学研究所国際シンポジウム(ロンドン)に参加し、インペリアル・カレッジ・ロンドンやオックスフォード大学など、欧州の研究者との情報交換を行いました。さらに、恒例の金沢国際がん生物シンポジウム(11 月)では、代謝・細胞老化・幹細胞をメインピックスとして、日本、米国、ドイツから第一線の研究者を招聘し、最先端のがん研究に関する情報収集と意見交換を行いました。その他、北海道大学遺伝子病制御研究所との国際シンポジウムの共同開催、シンガポール国立大学への若手教員の短期派遣、ロシア 3 大学(サンクトペテルブルグ医科大学、クラスノヤルツク医科大学、カザン大学)大学院生の短期研修受け入れなど、将来の国際的機関連携の強化・拡大に向けた取り組みも進めています。これらの国際的活動を基に、本年度、文部科学省より募集のあった国際共同利用・共同研究拠点の申請に挑戦いたしました。残念ながら採択に至りませんでした。評価コメントには「海外の研究機関との交流を進めており、共同利用・共同研究に多数の関連研究者が参加することが見込まれ、若手研究者の育成に積極的に取り組んでいると評価できる」と記載されるなど、一定の評価を受けており、今後益々この方向を発展させることで、将来の国際的研究拠点への道筋が見えてくると確信いたしました。

ここに、2018 年の各研究分野の活動状況を報告いたします。本研究所の取り組みについてご理解いただく機会となれば幸いです。

金沢大学がん進展制御研究所長 平尾敦